

App Bridge Kicker
Linux Agent
インストールガイド

Ver. 1.19.0

目次

1. 本書の役割	1
1.1 本書の役割.....	1
1.2 前提ドキュメント.....	1
1.3 モジュールの前提条件.....	1
2. 対象ノードの登録	2
3. Agent のインストール	5
3.1 Agent の前提条件、対象 OS.....	5
3.2 対象サーバへのログイン.....	5
3.3 セットアップファイルのダウンロード.....	5
3.4 インストール.....	6
3.5 初期設定.....	7
3.6 サービスの起動.....	10
3.7 サービスの起動確認.....	10
3.8 自動起動の設定.....	11
3.9 Java コマンドパスの変更.....	12
4. Agent のアンインストール	13
5. Agent のアップグレード	13
6. ノードの再設定	13
7. Linux Agent のサービス制御	14
7.1 サービス構成.....	14
7.2 サービス制御.....	14
7.3 OS シャットダウン、再起動に関する注意.....	15
8. 設定ツール操作方法	16
8.1 設定ツールの起動.....	16
8.2 設定ツールのモード.....	16
8.3 メインモードの操作.....	16
8.4 アカウント設定モードの操作.....	17
8.5 プロキシ設定モードの操作.....	17
8.6 ディレクトリ設定モードの操作.....	17
9. Agent 設定	18
9.1 Agent 環境設定.....	18
9.2 プロキシ設定.....	20
9.3 サーバ ID の確認.....	22
9.4 スケーリングタグの確認.....	23
10. アカウントの設定	24
10.1 プロセスアカウントの変更.....	24
10.2 アカウントの準備.....	24

10.3	プロセスアカウントの設定追加.....	24
10.4	プロセスアカウントの設定変更.....	26
1 1.	Agent の監視.....	28
1 2.	App Bridge Kicker データディレクトリ.....	29
12.1	保存される内容.....	29
12.2	標準パス.....	29
12.3	ディレクトリの移動.....	29
12.4	モジュールキャッシュの縮小とクリア.....	31

1. 本書の役割

1.1 本書の役割

本書は、App Bridge Kicker Linux Agent のインストール方法について説明するものです。

1.2 前提ドキュメント

本書は、以下のドキュメントを前提に記載されています。本書をご覧いただく前にご一読下さい。

- App Bridge ファーストステップガイド
- App Bridge 管理者ガイド
- App Bridge Kicker 概説

1.3 モジュールの前提条件

App Bridge Kicker が利用者向けに提供するモジュールの対象 OS、前提条件は、以下のドキュメントに記載されています。

- Linux Agent サポートリスト

2. 対象ノードの登録

App Bridge Monitor と App Bridge Kicker は同じノード情報を共有します。このため既に App Bridge Monitor のノードとして登録されているサーバに App Bridge Kicker をインストールする場合、本章の操作は不要です。

App Bridge Kicker Linux Agent を利用するためには、対象サーバをノードとして登録します。本操作はユーザロール「EnterpriseAdmin」「NodeAdmin」のみが実施できます。

新しいノードを登録するには、App Bridge サイトにログインいただき、<メインメニュー/ノード管理/ノード一覧>の[ノード登録]ボタンをクリックします。



The screenshot shows the 'Menu > ノード一覧' (Menu > Node List) page. At the top, there is a search bar labeled 'ノードCD(前方一致)' (Node ID (Prefix Match)) and a checkbox for '解約済を表示' (Show Expired). To the right are buttons for '検索' (Search) and 'ノード登録' (Node Register), with the latter being highlighted by a red box. Below the search bar is a table with the following columns: 'ノードCD' (Node ID), 'ノード名' (Node Name), '種類' (Type), and 'スケーリング制御' (Scaling Control). The table contains one entry: 'WS1' with 'Windowsサーバ1号機' (Windows Server 1) as the name, 'Windows(Amazon EC2)' as the type, and a checkbox for scaling control.

ノードCD	ノード名	種類	スケーリング制御
WS1	Windowsサーバ1号機	Windows(Amazon EC2)	<input type="checkbox"/>

登録するノードの情報を入力します。入力が完了したら、[確認]ボタンをクリックします。

Menu > ノード一覧 > ノード登録

ノード基本情報

ノードCD	<input type="text"/>
ノード名	<input type="text"/>
種類	--- <input type="button" value="v"/>
スケーリング制御	<input type="checkbox"/>

ノード基本情報は、利用者サーバの基本情報を登録するものです

- 本情報の登録により、App Bridge Monitor Agent、App Bridge Kicker Agentが利用可能となります
- App Bridge Monitor Agentをインストールしない限り、本情報を登録しても、Agent監視の課金は発生しません
- App Bridge Kicker Agentをインストールしない限り、本情報を登録しても、オーナーノード課金は発生しません

ノード契約情報

統計保有日数(日)	--- <input type="button" value="v"/>
応答監視エンドポイント上限数(件)	選択しない <input type="button" value="v"/>
API監視	<input type="checkbox"/> 有効

ノード契約情報は、App Bridge Monitorの利用者サーバ監視設定であり、課金に影響するものです

- 統計保有日数は、Agent監視、応答監視の統計情報保存する日数であり、各監視の単価に影響します
- 応答監視は、申請ベースの課金であり、エンドポイント上限数を登録した時点から課金が発生します
- API監視は、申請ベースの課金であり、API監視を有効とした時点から課金が発生します

項目名称	設定内容	備考
ノード CD	対象ノードを一意に識別するためのノード CD を入力します。以降の処理には、このノード CD が必要です	(※1)
ノード名	任意のノード名を入力します	
種類	ノードの種類をプルダウンメニューから選択します	(※2)
スケーリング制御	AWS Auto Scaling など、サーバインスタンスを動的に増減させる場合チェックします	(※3)
統計保有日数 (日)	統計情報を保存する日数を選択します	(※4)
応答監視エンドポイント上限数 (件)	応答監視 (Ping 監視、HTTP 監視、TCP ポート監視) のエンドポイント数を選択します。エンドポイント数は、監視したい Ping FQDN、HTTP URL、HTTPS URL、TCP FQDN とポート番号の合計です	(※4) (※5)
API 監視	API を利用したインスタンスのステータス監視を実施する場合、チェックします	(※4) (※5)

※1：先頭英字で半角英字、数字、アンダースコア、ハイフンで構成された 32 文字で指定します

※2：次ページ「種類の一覧」を参照下さい

※3：スケーリング制御の解説は「App Bridge ファーストステップガイド」を参照下さい

※4：App Bridge Kicker の動作には影響しません

※5：本画面で設定した時点から課金が発生します。App Bridge Monitor を使用しない場合、本項目は設定しないで下さい

種類の一覧は以下のとおりです。グレーアウトしている種類は本マニュアルの対象外です。

#	種類	内容	スケーリング制御
1	Windows (On-Premises)	Windows サーバ	選択可
2	Windows (Microsoft Azure Cloud Services)	Azure Cloud Services で稼働する Windows サーバ	必須
3	Windows (Microsoft Azure Virtual Machines)	Azure Virtual Machines で稼働する Windows サーバ	選択可
4	Windows (Amazon EC2)	Amazon Web Services で稼働する Windows サーバ	選択可
5	Linux (On-Premises)	Linux サーバ	選択可
6	Linux (Microsoft Azure Virtual Machines)	Azure Virtual Machines で稼働する Linux サーバ	選択可
7	Linux (Amazon EC2)	Amazon Web Services で稼働する Linux サーバ	選択可
8	Databases Host	Microsoft Azure、または Amazon RDS の SQL Server サービス	選択不可
9	Network Device	ネットワーク機器 (ルータ、ファイアウォールなど)	選択不可

表示されたノード登録確認画面で入力した内容を確認し、「内容を確認しました」のチェックボックスにチェックを入れて、[決定]ボタンをクリックします。

Menu > ノード一覧 > ノード登録確認

内容を確認しました

ノードを登録する場合、「内容を確認しました」にチェックを付けて決定ボタンを押してください。

ノードID	LX1
ノード名	Linuxサーバ1号機
種類	Linux(On-Premises)
スケーリング制御	<input type="checkbox"/>
統計保有日数(日)	40
応答監視エンドポイント上限数(件)	選択しない
API監視	<input type="checkbox"/> 有効

これでノード登録は完了です。ご登録頂いたメールアドレスに「App Bridge 利用手続き完了通知 (ノード登録完了)」が電子メールで送信されます。

3. Agent のインストール

3.1 Agent の前提条件、対象 OS

Linux Agent がサポートする環境、前提条件については、「Linux Agent サポートリスト」を参照下さい。
なお、App Bridge Monitor Linux Agent がインストールされている環境に App Bridge Kicker Linux Agent をインストールする場合、Agent のバージョンを同一にする必要があります。

3.2 対象サーバへのログイン

対象のサーバに root 権限を持つユーザでログインします。

3.3 セットアップファイルのダウンロード

以下の URL より、セットアップファイル (SetupLB4Linux_v011900.tar.gz) をダウンロードします。

http://www.app-bridge.com/Setup_Kicker.html

3.4 インストール

(1) セットアップファイルの解凍

ダウンロードしたセットアップファイルを対象サーバ上の任意のディレクトリに配置し、以下のコマンドで解凍して下さい。

コマンド

```
tar zvxf SetupLB4Linux_v011900.tar.gz
```

解凍が完了すると、セットアップファイルと同じディレクトリにインストールスクリプト(lb4install)が配置されます。

(2) パーMISSIONの変更

インストールスクリプトのパーMISSIONを変更します。

コマンド

```
chmod +x lb4install
```

(3) App Bridge Kicker Linux Agent のインストール

インストールスクリプトを実行し、App Bridge Kicker Linux Agent の必要ファイルをインストールします。

コマンド

```
./lb4install
```

実行例

```
# ./lb4install
Copying Files...
Install completed.
```

(4) 環境変数 PATH の更新

インストールが完了すると、環境変数 PATH に「/opt/lb4/bin」を追加するためのファイル(/etc/profile.d/lb4.sh)が配置されています。以下のコマンドを実行し、環境変数 PATH を更新して下さい。

コマンド

```
./etc/profile
```

※環境変数 PATH が更新されない場合は、一度ログインし直して下さい。

以上でインストールは完了です。引き続き「3.5 初期設定」に進んで下さい。

3.5 初期設定

App Bridge Monitor と App Bridge Kicker は初期設定情報を共有します。このため既に App Bridge Monitor Agent がインストールされているサーバに App Bridge Kicker Agent をインストールする場合、本節の操作は不要です。

(1) 設定ツールの起動

以下のコマンドを実行し、App Bridge Kicker Linux Agent の設定ツールを起動します。

※(2)以降は設定ツール内での操作となります。

コマンド

```
lb4-control.sh config
```

実行例

```
# lb4-control.sh config
Welcome to App Bridge Kicker ver 1.19.0.0 Configuration Tool.
Main>
```

(2) 環境設定ファイル(UCSDownload.ini)のダウンロード

環境設定ファイル(UCSDownload.ini)をダウンロードします。以下のコマンドを実行し、表示されるメッセージに従って「App Bridge 利用手続き完了通知」の内容を入力して下さい。

※入力を中止する場合は「¥」(バックスラッシュ2つ)を入力して下さい。

コマンド

```
Main> download
```

#	表示されるメッセージ	入力内容
1	Please input "FQDN" stated in App Bridge Notification Mail (Node Registration).	mercury.app-bridge.com を入力します
2	Please input "Port Number" stated in App Bridge Notification Mail (Node Registration).	443 を入力します
3	Please input "User CD" stated in App Bridge Notification Mail (Node Registration).	「App Bridge 利用手続き完了通知」の「ユーザ CD」を入力します (※1)
4	Please input "Password" stated in App Bridge Notification Mail (Node Registration).	「App Bridge 利用手続き完了通知」の「パスワード」を入力します
5	Please input "Owner CD" stated in App Bridge Notification Mail (Node Registration).	「App Bridge 利用手続き完了通知」の「オーナー CD」を入力します
6	Please input "Node CD" stated in App Bridge Notification Mail (Node Registration).	サーバの「ノード CD」を入力します (※2)
7	Using proxy server for internet access? (yes/no)	プロキシサーバを使用する場合「yes」、使用しない場合「no」を入力します。「no」を入力した場合、#8以降は表示されません
8	Please input FQDN of the proxy server.	プロキシサーバの FQDN (IP アドレス) を入力します
9	Please input port number of the proxy server.	プロキシサーバのポート番号を入力します
10	Please input user name for authentication. (If you don't need, proceed next.)	プロキシ認証に使用するユーザ ID 入力します。ユーザ ID が不要の場合、未入力のままエンターキーを押下して下さい
11	Please input user password for authentication. (If you don't need, proceed next.)	プロキシ認証に使用するパスワードを入力します。パスワードが不要の場合、未入力のままエンターキーを押下して下さい

※1: 指定するユーザアカウントには、ServiceAdmin 以上の権限が必要です。

※2: 「2. 対象ノードの登録」で登録したノード CD を指定します。

実行例

```
Main> download
Please input "FQDN" stated in App Bridge Notification Mail (Node Registration).
(中略)
Using proxy server for internet access? (yes/no)
download> yes
(中略)
Successfully downloaded "UCSDownload.ini".
```

環境設定ファイルの取得に成功した場合、上記のような成功メッセージ (Successfully downloaded "UCSDownload.ini".) が表示されます。

(3) 環境設定ファイル(UCSDownload.ini)の適用

ダウンロードした環境設定ファイルを App Bridge Kicker Agent に適用します。以下のコマンドを実行して下さい。

コマンド

```
Main> install
```

実行例

```
Main> install  
Initial configuration completed.
```

以上で App Bridge Kicker Linux Agent の初期設定は完了です。

3.6 サービスの起動

App Bridge Kicker Linux Agent は以下のサービスで構成されています。

#	サービス名	概要	備考
1	lb4agentd	LB4 Agent Service	使い方: start stop status

以下のコマンドにより、サービスを起動します。(※サービスは service コマンド、systemctl コマンド (systemd 環境の場合) からの起動も可能です。)

コマンド

```
lb4-control.sh start
```

実行例

```
# lb4-control.sh start  
[lb4agentd]: Running
```

3.7 サービスの起動確認

以下のコマンドにより、サービスの状態を確認します。(※サービスのステータスは service コマンド、systemctl コマンド (systemd 環境の場合) からも確認可能です。)

コマンド

```
lb4-control.sh status
```

実行例

```
# lb4-control.sh status  
[lb4agentd]: Running
```

3.8 自動起動の設定

サーバ起動時に自動的に App Bridge Kicker Linux Agent が起動するように設定します。本設定は必須ではありませんが、運用上、設定することを推奨しています。

(1) systemd 環境の場合

以下のコマンドで設定します。

コマンド

```
systemctl enable lb4agentd.service
```

(2) RedHat 系ディストリビューション（非 systemd 環境）の場合

以下のコマンドで設定します。

コマンド

```
chkconfig --add lb4agentd
```

※「chkconfig lb4agentd on」でも可

(3) Debian 系ディストリビューション（非 systemd 環境）の場合

以下のコマンドで設定します。

コマンド

```
update-rc.d lb4agentd defaults
```

(4) SUSE 系ディストリビューション（非 systemd 環境）の場合

以下のコマンドで設定します。

コマンド

```
insserv lb4agentd
```

3.9 Java コマンドパスの変更

Linux Agent は、デフォルトでは path が通っている java コマンドを使用して起動します。Linux Agent を path が通っている java とは異なるバージョンで起動したい場合、下記設定ファイルに java コマンドのパスを指定します。

設定ファイル	/etc/opt/lb4/lb4config.ini
設定キーワード	[JavaCommandPath]

設定例

```
[JavaCommandPath]
/usr/lib/jvm/java-1.8.0-amazon-corretto/jre/bin
```

上記の設定例は、path が通っていない Amazon Corretto 8 を、Linux Agent の実行に利用する際の設定例です。

4. Agent のアンインストール

アンインストール用スクリプト (/opt/lb4/bin/lb4uninstall) を実行することで App Bridge Kicker Linux Agent をアンインストールできます。

アンインストール後は、以下のディレクトリが対象サーバから削除されずに残り、App Bridge Kicker Linux Agent を再度インストールしたときに設定を引き継ぐことができます。

残るディレクトリ	役割
/etc/opt/lb4	App Bridge Kicker Linux Agent 管理ファイルの配置ディレクトリ
/opt/lb4/ini	App Bridge Kicker Linux Agent 設定ファイルの配置ディレクトリ
/var/log/lb4	App Bridge Kicker Linux Agent のログ出力先
/var/lb4/AppBridgeKicker	App Bridge Kicker Linux Agent データディレクトリ (利用者により変更可能)

実行例

```
# lb4uninstall
Uninstall App Bridge Kicker? (y/n)          (アンインストール確認)
y
Uninstalling...
[lb4agentd]: Stopped
Uninstalled App Bridge Kicker.
```

5. Agent のアップグレード

Linux Agent を対象サーバからアンインストールし、新しいバージョンをインストールすることで Linux Agent のアップグレードができます。

6. ノードの再設定

App Bridge Monitor と App Bridge Kicker は同じノード情報を共有します。このため既に App Bridge Monitor Agent がインストールされているサーバでノードの再設定を行った場合、App Bridge Monitor Agent についてもノードの再設定が行われます。

インストールしている Agent を異なるノードに再設定する場合、「3.5 初期設定」に従い、設定ツールを起動し、初期設定を再実行して下さい。

7. Linux Agent のサービス制御

7.1 サービス構成

App Bridge Kicker Linux Agent は以下のサービスで構成されています。

#	サービス名	概要	備考
1	lb4agentd	LB4 Agent Service	

7.2 サービス制御

Agent サービスの操作方法を以下に示します。

(1) service コマンドによる実行（非 systemd 環境：SysVinit/Upstart）

以下のコマンドを実行します。コマンド引数には「start」「stop」「status」のいずれかを指定します。

コマンド

```
service lb4agentd <コマンド引数>
```

実行例

```
# service lb4agentd status
[lb4agentd]: Running
```

(2) systemctl コマンドによる実行（systemd 環境）

以下のコマンドを実行します。コマンド引数には「start」「stop」「status」のいずれかを指定します。

コマンド

```
systemctl <コマンド引数> lb4agentd.service
```

実行例

```
# systemctl status lb4agentd.service
lb4agentd.service - LB4 Agent Service
   Loaded: loaded (/etc/systemd/system/lb4agentd.service; enabled; vendor preset: disabled)
   Active: active (running) since Tue 2020-10-20 02:29:04 UTC; 1s ago
     Main PID: xxxx (lb4agentd)
    CGroup: /system.slice/lb4agentd.service
            └─xxxx /bin/bash /etc/opt/lb4/lb4agentd start
            └─xxxx java -Djdk.xml.entityExpansionLimit=0 -Djvm.pid=xxxx -Djdk....
   . . . . .
```

(3) 設定コマンドによる実行

App Bridge Kicker Linux Agent では、各種設定を変更するための設定コマンド(/opt/lb4/bin/lb4-control.sh)を提供しています。設定ツールを以下の引数で実行することで、App Bridge Kicker サービスを操作することができます。

コマンド

```
lb4-control.sh <コマンド引数>
```

コマンド引数には「start」「stop」「status」のいずれかを指定します。

実行例

```
# lb4-control.sh start  
[lb4agentd]: Running
```

7.3 OS シャットダウン、再起動に関する注意

Linux Server は、シャットダウンを要求されると、稼働中のサービスに停止を要求し、サービス停止待ち時間（※1）を経過しても終了しないサービスを強制終了します。

App Bridge Kicker Linux Agent でステップインスタンスが実行されている場合、サービス停止待ち時間内に終了できないケースが多く、サービスが強制終了された場合、ステップインスタンスの結果を保証できません。

このため、Linux Server をシャットダウンする場合、App Bridge Kicker Linux Agent を停止し、その後シャットダウンを実施して下さい。

ステップ定義で「シャットダウン要求」を設定することにより、ステップ正常終了時に OS をシャットダウン（またはリブート）させることが可能です。

この機能では、サービスの停止を確認してから OS にシャットダウンを要求するため、安全に OS をシャットダウンできます。設定の詳細は、「App Bridge Kicker タスクオペレーションガイド」を参照下さい。

※1：サービス停止待ち時間は、OS バージョンや環境によって異なる可能性があります

8. 設定ツール操作方法

8.1 設定ツールの起動

App Bridge Kicker Linux Agent では、各種設定を実施するためツール(/opt/lb4/bin/lb4-control.sh)を提供しています。

設定ツールを起動するためには、以下のコマンドを実行して下さい。

コマンド

```
lb4-control.sh config
```

本節で説明する操作は設定ツール内での操作となります。複数の項目を連続して入力する操作では、「¥¥」(バックslash 2つ)を入力することで、入力を中止することができます。

8.2 設定ツールのモード

設定ツールには設定項目別にメインモード、プロキシ設定モード、アカウント設定モード、及びディレクトリ設定モードの 4 つのモードがあり、それぞれ実行できるコマンドが異なります。起動時のモードはメインモードです。

8.3 メインモードの操作

メインモードでは、App Bridge Kicker Agent サービスの操作、および初期設定を行います。

【コマンド一覧】

コマンド	処理内容
start	App Bridge Kicker サービスを起動します
stop	App Bridge Kicker サービスを停止します
status	App Bridge Kicker サービスの状態を表示します
download	環境設定ファイルをダウンロードします
install	環境設定ファイルを適用します
config	Agent 環境設定を照会、編集します
cache [shrink]	モジュールキャッシュを圧縮します
cache clear	モジュールキャッシュをクリアします
info	サーバ ID、スケーリングタグを表示します
account	アカウント設定モードへ遷移します
proxy	プロキシ設定モードに遷移します
directory	ディレクトリ設定モードへ遷移します
help	ヘルプを表示します
exit	設定ツールを終了します

※[]は省略可

8.4 アカウント設定モードの操作

アカウント設定モードでは、App Bridge Kicker Linux Agent から起動される実行プロセスのユーザ設定を行います。

【コマンド一覧】

コマンド	処理内容
add	プロセスの実行アカウントを追加します
show	プロセスの実行アカウント一覧を表示します
rm	プロセスの実行アカウントを削除します
edit	プロセスの実行アカウントを変更します
help	ヘルプを表示します
exit	メインモードに戻ります

8.5 プロキシ設定モードの操作

プロキシ設定モードでは、App Bridge Kicker Linux Agent が通信する際に使用するプロキシの情報を編集し、接続確認を行います。

【コマンド一覧】

コマンド	処理内容
edit	プロキシ設定を編集します
clear	プロキシ設定を削除します
show	現在のプロキシ設定を表示します
test	App Bridge センタとの接続確認を行います
help	ヘルプを表示します
exit	メインモードに戻ります

8.6 ディレクトリ設定モードの操作

ディレクトリ設定モードでは、App Bridge Kicker データディレクトリの移動を行います。

【コマンド一覧】

コマンド	処理内容
edit	データディレクトリパスを変更します
show	データディレクトリパスを表示します
help	ヘルプを表示します
exit	メインモードに戻ります

9. Agent 設定

9.1 Agent 環境設定

App Bridge Kicker Linux Agent 環境設定を実施するには、設定ツールを利用します。表示された環境設定画面で、Agent 環境を変更できます。変更を反映するには、App Bridge Kicker Linux Agent を再起動する必要があります。

(1) 設定ツールの起動

設定ツールを起動します。(起動方法は、「3.5 初期設定」の(1)を参照して下さい)

(2) 環境設定モードへ移行

設定ツールの起動時のモードであるメインモードで以下のコマンドを実行し、環境設定モードへ移行します。

コマンド

```
Main> config
```

実行例

```
Main> config
Current Settings
[1] Tags:
[2] Number of Worker Threads: 4
[3] Maximum Upload Bandwidth (Mbps): 128
[4] Maximum Download Bandwidth (Mbps): 128
[5] Reject Shutdown: false
[6] Log a Task Abort as "FATAL": false

Please select the item number to be set (1-5).
config> 1
Please input Tags. (CSV format)
config> batch
Tags have been updated.

Agent restart is required for changes to take effect.

Current Settings
[1] Tags: batch
[2] Number of Worker Threads: 4
[3] Maximum Upload Bandwidth (Mbps): 128
[4] Maximum Download Bandwidth (Mbps): 128
[5] Reject Shutdown: false
[6] Log a Task Abort as "FATAL": false

Please select the item number to be set (1-5).
config>
```

設定対象の番号を入力し、プロンプトに従って設定します。設定対象の詳細は以下のとおりです。

番号	設定項目	内容	備考
1	Tag	<p>当該サーバのノードタグを CSV 形式で設定します。指定されたノードタグは、Web サイト/ノード管理で設定されたノードタグとマージされ、タスクインスタンスの抽出に使用されます。本項目は下位互換のため用意されています。通常はノード管理でタグを設定して下さい</p> <p>許可されている形式は以下の通りです</p> <p>【単バイト文字列】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 許可文字数：1～24 文字 ● 許可文字種：英字、数字、_（アンダースコア） <p>【多バイト混在文字列】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 許可文字数：1～10 文字 ● 許可文字種：英字、数字、_（アンダースコア）、多バイト文字（サロゲートペア、スペース以外） 	最大数は 16 です
2	Number of Worker Threads	起動するワーカースレッド数を設定します	初期値は CPU コア×4 です
3	Maximum Upload Bandwidth (Mbps)	<p>データをアップロードする際の最大ネットワーク帯域を指定します（※1）</p> <p>入力可能な値は、8、16、32、64、128、256、512 です</p>	初期値は 128Mbps です
4	Maximum Download Bandwidth (Mbps)	<p>データ、またはモジュールをダウンロードする際の最大ネットワーク帯域を指定します（※1）</p> <p>入力可能な値は、8、16、32、64、128、256、512 です</p>	初期値は 128Mbps です
5	Reject Shutdown	ステップ定義のシャットダウン要求を無視する。この項目を有効化したとき、ステップ定義によるサーバ停止、サーバリブート、サービス停止は実施されない	初期値は false です
6	Log a Task Abort as "FATAL"	ステップの異常終了を FATAL エラーとして記録する場合、有効化します。ステップの異常終了は App Bridge センタから通知されます。App Bridge Monitor 以外の監視ツールにステップの異常終了を検知させたい場合、有効化して下さい	初期値は false です

※1：各ワーカースレッドが指定帯域を使用する点に留意下さい

9.2 プロキシ設定

App Bridge Monitor と App Bridge Kicker は同じプロキシ設定を共有します。このため既に App Bridge Monitor Agent がインストールされ、プロキシが設定されているサーバでは、本節の操作は不要です。

App Bridge Kicker Linux Agent が使用するプロキシ情報を設定します。対象サーバからのインターネット接続にプロキシを使用している場合に設定して下さい。設定を反映するには、App Bridge Kicker Linux Agent を再起動する必要があります。

(1) 設定ツールの起動

設定ツールを起動します。(起動方法は、「3.5 初期設定」の(1)を参照して下さい)

(2) プロキシ設定モードへ移行

設定ツールの起動時のモードであるメインモードで以下のコマンドを実行し、プロキシ設定モードへ移行します。

コマンド

```
Main> proxy
```

(3) プロキシ設定の変更

設定ツールのプロキシ設定モードで以下のコマンドを実行し、メッセージに従って設定項目を入力します。

コマンド

```
Proxy> edit
```

#	表示されるメッセージ	入力内容
1	Please input FQDN of the proxy server.	プロキシサーバの FQDN (IP アドレス)
2	Please input port number of the proxy server.	プロキシサーバのポート番号
3	Please input user name for authentication. (If you don't need, proceed next.)	プロキシ認証に使用するユーザ ID 不要の場合、未入力のままエンターキーを押します
4	Please input user password for authentication. (If you don't need, proceed next.)	プロキシ認証に使用するパスワード 不要の場合、未入力のままエンターキーを押します

実行例

```
Proxy> edit
Current Setting
[ProxyServerFQDN]
[ProxyServerPort]      0
[ProxyUser ID]
[ProxyUserPassword]   *****

Please input FQDN of the proxy server.
edit> sampleproxy.co.jp
Please input port number of the proxy server.
edit> 8080
Please input user name for authentication. (If you don't need, proceed next.)
edit> proxyuser
Please input user password for authentication. (If you don't need, proceed next.)

Changed proxy server settings.

Agent restart is required for changes to take effect.

Proxy>
```

※入力されたパスワードの内容は表示されません。

9.4 スケーリングタグの確認

サーバインスタンスのスケールタグを確認するためには、設定ツールを利用します。なお、スケールタグ情報は、Scaling 制御されたノードのみで表示されます。

スケールタグについては、「App Bridge Kicker 概説/スケールタグによるステップインスタンス実行」を参照下さい。

(1) 設定ツールの起動

設定ツールを起動します。(起動方法は、「3.5 初期設定」の(1)を参照して下さい)

(2) サーバ ID の表示

設定ツールの起動時のモードであるメインモードで以下のコマンドを実行し、サーバ ID を表示します。

コマンド

```
Main> info
```

実行例

```
Main> info
```

```
Server ID: [REDACTED]
```

```
Scaling Tag: [REDACTED]
```

```
Main>
```

10. アカウントの設定

10.1 プロセスアカウントの変更

App Bridge Kicker Linux Agent から起動される実行プロセスのアカウント（ユーザ）を変更することができます。これにより、プロセスの実行権限を制御でき、ネットワークリソースのアクセス権限を設定することができます。設定を反映するには、App Bridge Kicker Linux Agent を再起動する必要があります。

10.2 アカウントの準備

プロセスアカウントには、タスクで実行するプログラムの実行権限を持つユーザが必要です。プロセスアカウントには、専用のユーザを使用します。プロセスアカウントを設定する場合、事前にプロセスアカウント用のユーザを作成して下さい。

プロセスアカウントは複数指定でき、Priority Number 順にタスクコード（正規表現）を評価し、最初に該当したプロセスアカウントで実行プロセスを起動します。該当するプロセスアカウントがなかった場合、実行プロセスは root で実行されます。

10.3 プロセスアカウントの設定追加

(1) 設定ツールの起動

設定ツールを起動します。（起動方法は、「3.5 初期設定」の(1)を参照して下さい）

(2) プロセスアカウント設定モードへ移行

設定ツールの起動時のモードであるメインモードで以下のコマンドを実行し、プロセスアカウント設定モードへ移行します。

コマンド

```
Main> account
```

(3) プロセスアカウント設定の追加

設定ツールのプロセスアカウント設定モードで以下のコマンドを実行し、メッセージに従って設定項目を入力します。

コマンド

```
Account> add
```

#	表示されるメッセージ	入力内容
1	Please input priority number of the account. (0-99999)	プロセスアカウントの Priority Number を設定 します
2	Please input a user to execute processes of Kicker Task.	ユーザ名を入力します
3	Do you need to load user profile? (yes/no)	ユーザプロファイルをロードする場合チェッ クします。ロードすることで、そのユーザで設 定されている環境変数などが利用できます。
4	Please input a regular expression of TaskCD to execute as this user. (Kicker agent executes all tasks as this user if you enter null value.)	このアカウントを使用するタスクコードの正 規表現を指定します。空値を指定した場合、全 てのタスクコードに該当します

実行例

```
Account> add
Please input priority number of the account. (0-99999)
add> 10
Please input a user to execute processes of Kicker Task.
add> taskuser
Do you need to load user profile? (yes/no)
add> yes
Please input a regular expression of TaskCD to execute as this user. (Kicker agent executes all
tasks as this user if you enter null value.)
add>
Added an account.

Agent restart is required for changes to take effect.

Account>
```

10.4 プロセスアカウントの設定変更

(1) 設定ツールの起動

設定ツールを起動します。(起動方法は、「3.5 初期設定」の(1)を参照して下さい)

(2) プロセスアカウント設定モードへ移行

設定ツールの起動時のモードであるメインモードで以下のコマンドを実行し、プロセスアカウント設定モードへ移行します。

コマンド

```
Main> account
```

(3) プロセスアカウント設定の変更

設定ツールのプロセスアカウント設定モードで以下のコマンドを実行し、メッセージに従って設定項目を入力します。

コマンド

```
Account> edit
```

#	表示されるメッセージ	入力内容
1	Please input priority number of the account. (0-99999)	プロセスアカウントの Priority Number を設定します
2	Please input a user to execute processes of Kicker Task.	ユーザ名を入力します
3	Do you need to load user profile? (yes/no)	ユーザプロファイルをロードする場合チェックします。ロードすることで、そのユーザで設定されている環境変数などが利用できます。
4	Please input a regular expression of TaskCD to execute as this user. (Kicker agent executes all tasks as this user if you enter null value.)	このアカウントを使用するタスクコードの正規表現を指定します。空値を指定した場合、全てのタスクコードに該当します

実行例

```
Account> edit
Current Setting
Priority Account LoadProfile TaskCDPattern
10 taskuser true
Please select the priority number to be edit.
edit> 10
Please input priority number of the account. (0-99999)
Current: 10
edit> 10
Please input new user of the account.
Current: taskuser
edit> taskuser
Do you need to load user profile of the account? (yes/no)
Current: yes
edit> no
Please input a regular expression of TaskCD to execute as this user. (Kicker agent executes all
tasks as this user if you enter null value.)
Current:
edit>
Updated an account.

Agent restart is required for changes to take effect.

Account>
```

1 1. Agent の監視

App Bridge Kicker Linux Agent の異常を早急に検知するため、利用者サーバで下記項目の監視を推奨します。App Bridge Monitor での監視を推奨しますが、他の監視ツールでも可能です。

なお、App Bridge Monitor Linux Agent を導入した場合、標準で下記監視が行われます。

(1) テキストログ

App Bridge Kicker Linux Agent は/var/log/lb4/lb4agentd.log.yyyy-MM-dd にログを記録します。FATAL レベルのログが記録された場合、通報し、Agent の状態を確認して下さい。

なお、ログメッセージについては、以下の置換処理が行われます。

#	置換される文字	置換後
1	バックスラッシュ	¥u005C
2	キャリッジリターン	¥u000D
3	ラインフィード	¥u000A

FATAL レベルのログ出力例

```
2020-11-18 06:19:01,003 FATAL - エラーメッセージ¥u000A . . . .
```

App Bridge Monitor で監視する場合、上記ログファイルをログローテーションパターン: LogRotation1 として監視対象とし、ログメッセージが正規表現「^. {24, 24}FATAL」にマッチする場合エラー判定するようエラー判定条件を設定ください。設定方法の詳細は、以下のドキュメントを参照ください。

- App Bridge Monitor Linux Agent 設定ガイド
- App Bridge Monitor エラー判定条件ガイド

(2) サービス状態

App Bridge Kicker Linux Agent の状態を監視し、実行中以外となった場合、通報し、Agent の状態を確認して下さい。

App Bridge Monitor で監視する場合、監視対象サービスとして「lb4agentd」を追加して下さい。

12. App Bridge Kicker データディレクトリ

12.1 保存される内容

App Bridge Kicker データディレクトリには、App Bridge Kicker Linux Agent のステップ実行データ、モジュールキャッシュが保存されます。

(1) ステップ実行データ

ステップ実行ごとの一時データが保存されます。ステップ実行データには、ダウンロードデータ、アップロードデータが含まれるため、多くの容量を占める場合があります。ステップ実行データは、App Bridge センタへのステップ実行結果通知が終了してから 240 分以上が経過すると、随時削除されます。

(2) モジュールキャッシュ

パブリックモジュール、プライベートモジュール実行時に、App Bridge センタからダウンロードしたモジュールデータは、モジュールキャッシュに格納され、再利用されます。モジュールキャッシュのデータは自動削除されません。モジュールキャッシュデータの削除方法は、後述の「モジュールキャッシュの縮小とクリア」を参照下さい。

12.2 標準パス

標準の App Bridge Kicker データディレクトリパスは、`/var/lb4/AppBridgeKicker` です。

12.3 ディレクトリの移動

App Bridge Kicker データディレクトリを移動するには、設定ツールを利用します。なお、本処理の実行に先立ち、App Bridge Kicker Linux Agent を停止する必要があります。

(1) 設定ツールの起動

設定ツールを起動します。(起動方法は、「3.5 初期設定」の(1)を参照して下さい)

(2) ディレクトリ設定モードへ移行

設定ツールの起動時のモードであるメインモードで以下のコマンドを実行し、ディレクトリ設定モードへ移行します。

コマンド

```
Main> directory
```

(3) ディレクトリ設定の変更

設定ツールのディレクトリ設定モードで以下のコマンドを実行し、メッセージに従って移動後のディレクトリパスを設定して下さい。これにより、新しいディレクトリが作成され、データがコピーされます。完了後、オリジナルディレクトリは手動で削除して下さい。

コマンド

```
Directory> edit
```

#	表示されるメッセージ	入力内容
1	Please input the absolute path of the new data folder.	移動後のデータディレクトリのフルパス
2	Confirm? (yes/no)	登録確認

実行例

```
Directory> edit
Please input the absolute path of the new data directory.
edit> /var/lb4/AppBridgeKicker2
Before: /var/lb4/AppBridgeKicker
After: /var/lb4/AppBridgeKicker2
Confirm? (yes/no)
edit> yes
Copying data...
Source: /var/lb4/AppBridgeKicker
Destination: /var/lb4/AppBridgeKicker2
Finished.
Please remove old data directory manually.

Directory>
```

12.4 モジュールキャッシュの縮小とクリア

(1) モジュールキャッシュの縮小

モジュールキャッシュの縮小では、モジュールキャッシュに保存されているデータのうち、最も新しいバージョンのみを残し、他のバージョンを削除します。

モジュールキャッシュを縮小するには、設定ツールを起動し（起動方法は、「3.5 初期設定」の(1)を参照して下さい）、cache コマンドを実行します。なお、本処理の実行に先立ち、App Bridge Kicker Linux Agent を停止する必要があります。

コマンド

```
Main> cache
```

実行例

```
Main> cache
Shrink the module cache. Continue it? (yes/no)
cache> yes
Start to shrink of module cache.
Finished to shrink of module cache.

Main>
```

(2) モジュールキャッシュのクリア

モジュールキャッシュのクリアでは、モジュールキャッシュに保存されているデータを全て削除します。

モジュールキャッシュのクリアを実施するには、設定ツールを起動し（起動方法は、「3.5 初期設定」の(1)を参照して下さい）、cache clear コマンドを実行します。なお、本処理の実行に先立ち、App Bridge Kicker Linux Agent を停止する必要があります。

コマンド

```
Main> cache clear
```

実行例

```
Main> cache clear
Clear the module cache. Continue it? (yes/no)
cache> yes
Start to Clear of module cache.
Finished to Clear of module cache.

Main>
```